狂言のことばの固定化と近世口語の影響

吉岡鎮香

狂言のことばは、狂言が台本として文字化されるようになった江戸初期から定着・整理され固定化していく江戸末期までの伝承過程で、舞台で演じられる科白劇のことばという性格上、伝統的な表現を基盤としながらも当時の口語の影響を受けて変化している。狂言のことばの変遷については、鷺流狂言のことばについて待遇表現の面から研究を行なってきたが[注1]、口語の影響による待遇価値の時代的な変化に関しての考察が課題として残っていた。そこで本稿では、引き続いて口語との関連の面から狂言のことばを考えてみたい。

先に鷺流本家仁右衛門派の台本の江戸時代を通じての対称代名詞の待遇価値の変化について考察したが、その中から次の二本の待遇表現体系の調査結果を用いて、本稿での考察は行なっていく。

「忠政本」　延宝六年（一六七八）書写。二十五番。鷺流最古本。田口和夫「鷺流狂言『延宝・忠政本』翻刻・解説」（静岡英和女学院短大紀要十一号・昭和五十四年）

「賢通本」　安政二年（一八五五）書写。百番。古川久校訂『狂言集』（『日本古典全書』昭和二十八年・朝日新聞社）

右の二本は、小山弘志氏が狂言の変遷を次の三期に分類された時期のうち、定着期に「忠政本」が固定期に「賢通本」がそれぞれあてはまり、書写時期には約二百年の隔たりがある。[注2]

一　成立・流動期　十四世紀～十六世紀半
二　筋書・台本定着期　十六世紀半～十七世紀半
三　台本固定・伝承期　十七世紀半～現代

一

「忠政本」・「賢通本」の待遇表現段階は山崎久之氏が大蔵流「虎明本」の語群を設定された方法[1]にならい、対称代名詞とそれに対応する述語部分の用例を調査・整理し待遇体系表にまとめることができた[2]。使用されている対称代名詞を敬意の高いものからあげると、「こなた」「そなた」「わごりよ」「汝」「そち」「おのれ」で、それぞれⅠ「こなた段階」Ⅱ「そなた段階」Ⅲ「わごりよ段階」Ⅳ「汝・そち段階」Ⅴ「おのれ段階」の五つの待遇表現の段階が設定できた。次に台本別にその対応関係と用例をあげ（述語部分は便宜上「言う」という意味の表現を帰納させる）、各台本の特徴と待遇体系表を示す。

A　「忠政本」

＊対称代名詞と述語部分の対応関係

Ⅰ　「こなた」　……　仰せらるる

Ⅱ　「そなた」　……　おしやる・いわるる

Ⅲ　「わごりよ」　……　おしやる・いふ

Ⅳ　「汝」・「そち」　……　いふ

Ⅴ　「おのれ」　……　ぬかす

（用例）

Ⅰ・さて〳〵此方にハきこへぬ事ヲおせらるゝ。
（神子⇩亨主・大般若）

Ⅱ・其方社さらりとおしやれ。某ハ請取らぬ。
（鴈屋⇩太郎冠者・雁盗人）

・そなたハりちきな事をいわるゝ。
（浄土僧⇩法華僧・宗論）

Ⅲ・あゝわごりよハはようおしやれと云に何ヲシテいさします。
（住持⇩新発意・骨皮）

・わごりよかさういふも某か推量した。
（主⇩太郎冠者・止動方角）

Ⅳ・やい〳〵あれかはようきたと云に汝ハりふじんなことヲ云そ。
（目代⇩羯鼓売・鍋八撥）

・そちは何と云そ。
（奏者⇩丹波百姓・昆布柿）

Ⅴ・己ハ推参ヲぬかす。

（迎手）太郎冠者・心はひ）

「そち」とでは待遇差はあるが使用範囲はほぼ同じで、人物関係によっては「わごりよ」の述部に平常動詞を対応させて「そち」と同じように使用している。

（特徴）

各対称代名詞ごとに明確な待遇段階がある。「わごりよ」と

「忠政本」（一六七八年）

動作主		動作					
代名詞	接辞	助動詞	言う	来る・行く	する	（て）くれる	その他
こなた	御——様 お——殿	（さ）せらる お——なさる お——やる	仰せらるる おせらるる	ござる 御出なさるる 御出なさる	なさるる なさる	（て）くだされ（い）	思召ます（る）
そなた	——殿	（お）——やる お——すい します（さしませ） します（しませ）	おしやる いわるる	ござる おりやる	めさる	ておくりやれ	のむ
わごりよ		さします します（しませ）	おしやる いふ	来る 行く	する	てくれい	のむ
汝	呼捨の人名		いふ	来る 行く	する	てくれい	
そち			いふ	来る 行く	する		
おのれ		居る	ぬかす		する		

B 「賢通本」

＊対称代名詞と述語部分の対応関係

Ⅰ 「こなた」 ―― 仰せらるる

Ⅱ 「そなた」 ―― おしやる・いふ

Ⅲ 「わごりよ」 ―― おしやる・いふ

Ⅳ 「汝」・「そち」 ―― いふ

Ⅴ 「おのれ」 ―― ぬかす

（用例）

Ⅰ・こなたのさやうに仰せらるるものを、なにとてお恨みと存じませうぞ。

（太郎冠者⇩主・組綯）

Ⅱ・してそなたも都へお上りやるとおしやるが、なんの用があつてお上りやるぞ。

（淡路百姓⇩丹波百姓・昆布柿）

・そなたはこの海道の茶屋をもしながら、そのやうな鈍な事は言はぬものぢや。

（太郎冠者⇩茶屋・木六駄）

Ⅲ・はてさてわごりよはむさとした事をおしやる。

（次郎冠者⇩太郎冠者・附子）

・わごりよが破魔弓を射るといふについて思ひ出いた。

（教手⇩聟・八幡前）

Ⅳ・やいやい。あれが先へ来たと言ふに、なぜに汝は理不尽な事を言ふぞ。

（目代⇩羯鼓売・鍋八撥）

・やい。そちは五百程の者を、なぜに多い多いとは言ふぞ。

（主⇩太郎冠者・今参）

Ⅴ・おのれ古傘を求めて失せて何のかのとぬかす。

（主⇩太郎冠者・末広がり）

（特徴）

「そなた」と「わごりよ」の間に使用範囲の差・待遇度の差ともにほとんどなく、同じ待遇段階と考えることができる。

「忠政本」と「賢通本」を比較しての大きな変化は、「そなた」の待遇度の下降と「わごりよ」の使用範囲の変化である。待遇段階は「忠政本」では「こなた段階」「そなた段階」「わごりよ段階」「汝・そち段階」「おのれ段階」の五段階であったが、約二百年後に書写された「賢通本」では「こなた段階」「そなた・わごりよ段階」「汝・そち段階」「おのれ段階」の四段階に変化したと言える。この変化の原因として、狂言が定着し固定化していく間に同種類曲での表現の統一と類型化が進んだこと

と、伝承される間に当時の口語と隔たっていったことも影響していると考えられる。

「賢通本」（一八五五年）

動作主		動作						
代名詞	接辞	助動詞	言う	来る・行く	する	（て）くれる	その他
こなた	御――様 ――様 お・御――様 ――殿様	（さ）せらる （さ）せらるる お――なさる お――なさるる	仰せらる 仰せらるる	ござる 出させらる お出でなさる お出なさるる	なさる なさるる	（て）下され（い）	思召す ごらうじる 上る 参るる 進ずる
そなた		お――やる お――すい さします（さしませ） します（しませ）	おしやる 言ふ	おりやる 来る 行く	めさる する	てたもる ておくりやれ	飲む
わごりよ		お――やる さします（さしませ） します（しませ）	おしやる 言ふ	おりやる わする 来る 行く	めさる	ておくりやれ	
汝	呼捨の人名		言ふ	来る 行く	する	てくれい	飲む
そち	呼捨の人名		言ふ	来る 行く	する		飲む
おのれ	呼捨の人名 呼捨の人名＋め	をる	ぬかす 言ふ	失せる 行く	する		食う 飲む

二

江戸時代前期にの口語に「お前」という対称代名詞が出現し、「こなた段階」より上の待遇の「お前段階」として使用されるようになる。用言・助動詞においては、「こなた段階」のそれに助動詞「ます」の接続した形で使用されるようになる。

山崎久之氏は、「お前段階」の新生が体系に与えた影響として次のように述べている。[注5]

江戸時代前期において第一段階になった「お前段階」の語群は室町時代の体系には存在しなかった。この段階は表現体系に大きな影響を与えた。まず第一次的影響は、近古で第一段階（こなた段階）に所属していた語群に対して現れた。この語群は代名詞「こなた様」を除くと、体言も活用語もそっくりそのまま第二段階へと下降したのであった。（「様」などの接尾辞は除く。）次に第二次的影響としては、近古で第二段階（そなた段階）であった語群は、第三段階に下降した。しかし近古の第三段階（わごりよ段階）は第四段階（汝・そち段階）には下降しなかった。そこで江戸前期の第三段階は近古の第二段階所属語群と第三段階所属語群の混合の形となった。

このように、口語の近世末から江戸時代前期への変化が、待遇表現の体系中、第三段階以上に甚大な変化を与えていることを指摘している。

次に山崎氏が江戸前期（上方）の男性語を整理されたもの[注6]に基づいて、代名詞と述語部分の対応関係とその用例、待遇体系表をあげる。また、同じく山崎氏が整理された室町時代末期の男性語の待遇体系表もあわせて示す。

江戸前期（上方）口語・男性語

＊対称代名詞と述語部分の対応関係

Ⅰ「お前」――仰せられます・おつしやります
Ⅱ「こなた」――仰せらるる・おつしやる
Ⅲ「そなた」――いやる
Ⅳ「そち」――いふ
Ⅴ「おのれ」――ぬかす・さへずる

（用例）

Ⅰ・おまへのやうに仰せられますれば聞へまする。
（井底掘⇩尼・大名なぐさみ曾我）
・お前は何とおつしやりました。

（下人⇩主の姫・吉祥天女安産玉）

Ⅱ・今女が命助かり、あら嬉しやと思ふ所、又縛めよ首を討てよと仰せらるゝ。こなた方は女に縄をかくると思召さうが、未来で十介様に苦悩の縄がかゝりまする。

（武士⇩母後室の兄・傾城阿波の鳴戸）

・これ〳〵七太夫殿、こなたにハあたりに人もなげなるききにくい事をおつしやる人かな。

（殿家老⇩姫家老・うかれきやうげん）

Ⅲ・それは其方の此事は誰にもいふなといやる。

（下人⇩姫・京ひながた）

Ⅳ・はて扨そちは親に孝行な事を言うた。

（殿⇩子供・姫蔵大黒柱）

Ⅴ・己れ真直にぬかさう。

（武士⇩侍の父・仏母摩耶山開帳）

・なんのおのれが口をさへづる。

（奴⇩奴・大名なぐさみ曾我）

（その他）「言う」の用例がなかったのでその他の用例をあげる。

［わごりよ］所属段階は「そなた段階」である。

・そなたや与兵衛がおや〳〵はをばがためには兄弟なり、わごりよたちはおいめいなり。どちらにひいきへんぱもない、…。

（伯母⇩姪・卯月の紅葉）

・わごりよたち、若しものことがあつたり共いかに九文きなかでもかんにんばしめさるな。

（父⇩娘・五十年忌歌念仏）

［汝］「なんじ」の読みはなく「われ」の読みがある。「そち段階」である。

・汝が姉は有馬の藤とて、美しい女であつた故、大名の気に入り、国へ伴れて御座る筈であつたに、何者やら藤を殺した。それで汝まで仕馴れぬ馬士をする。

（馬方六蔵⇩十四五才の馬子）

室町時代末期（男性語）

	第一段階（大敬語）	第二段階（普通敬語）	第三段階	第四段階	第五段階
代名詞（接尾辞）	こなた こなた様 （様）	そなた （殿）	わごりよ おぬし あれに （呼捨）	汝 そち われ （呼捨）	おのれ （人名—め）
動詞	言う	おしやる	言う	言う	ぬかす
	仰せらるる おせらるる				
動詞	来る、居る、行く	おじやる おりやる	来る 行く わする	来る 行く わする	うする
	ござる				
動詞	くれる	たもる	くるる	くるる	
	下さるる				
助動詞・補助動詞	させらるる お…なさるる お—ある（お—やる）	めさるる お…やる お—そい	しめ・さしめ い・さい		をる

江戸前期（男性語）

	代名詞		動詞				助動詞・補助動詞
			言う	来る、居る、行る、く	くれる		
第一段階（大敬語）	お前 お前様	こなた様	おつしやり（れ）ます 仰せられます	ございます おこしなされます お出でなされます	下さり（れ）ます		（御）—なされます （御）—遊ばされます （御）—遊ばします しやり（れ）ます
第二段階（普通敬語）	こなた 貴様 御自分 おんみ		おつしやる 仰せらるる	ござる おこしなさる お出なさる	下さるる		（御）—なさるる （御）—遊ばさるる （御）—遊ばす しやる
第三段階	そなた わが身 おのし・おぬし おみ	其の方	いやる	おじやる	たもる		—めさるる やる お＝やる （武士・老人）
第四段階	そち われ わいら		いふ	行く 来る 居る	くるる		
第五段階	おのれ おのら うぬら		ぬかす さへづる ほざく	うせる			をる ほざく くさる けつかる

三

「忠政本」と「賢通本」を比較しての大きな変化は、「そなた」の待遇度が下降し「わごりよ」と同じ待遇段階の語群となったことによる待遇段階の五段階から四段階への変化であった。また、江戸前期の口語の待遇段階も「お前段階」の出現により、「そなた段階」であった語群は「わごりよ段階」と同じ段階に下降した。

狂言で使用されている対称代名詞は室町期に使用された口語の対称代名詞と一致し、台本定着期に書写された「忠政本」は待遇段階も同じ段階に分類できる。しかし、台本固定期に書写された「賢通本」の待遇段階は同じとは言えず、変化している。

対称代名詞を敬意の高いものからあげると（おのれは省略）

「忠政本」	こなた	そなた	わごりよ	汝・そち
「賢通本」	こなた		そなた	汝・そち
			わごりよ	
室町末期	こなた	そなた	わごりよ	汝・そち
江戸前期	お前	こなた	そなた	そち
			わごりよ	われ

このように江戸前半期の口語に「お前」が出現し、「こなた段階」より高い待遇の「お前段階」として使用されるようになった。そのため口語の待遇段階は、「こなた段階」「そなた段階」「わごりよ段階」「汝・そち段階」「おのれ段階」の五段階から、「お前段階」「こなた段階」「そなた・わごりよ段階」「そち段階」「おのれ段階」の五段階となった。一方、狂言の対称代名詞の待遇段階は、「こなた段階」「そなた段階」「わごりよ段階」「汝・そち段階」「おのれ段階」の五段階から、「こなた段階」「そなた・わごりよ段階」「汝・そち段階」「おのれ段階」の四段階となった。

以上のことから、江戸時代を通じて狂言の筋書・台本が定着し固定化していくまでの伝承過程で、狂言の対称代名詞の中に江戸期の口語の「お前」を取り入れることは避けたが、待遇段階は口語の「お前段階」の出現の影響を受けて四段階に変化したと結論づけることができる。

注1：「鷺流狂言における待遇表現の研究」（『甲南国文』第四十三号・平成八年三月）「狂言における対称代名詞の待遇価値の変遷」（『甲南国文』第四十四号・平成九年三月）以下前稿と呼ぶ。

注2：小山弘志「狂言の変遷」（『文学』二十四巻・昭和三十一年七月）

注3：山崎久之『国語待遇表現体系の研究・近世編』（昭和三十八年四月・武蔵野書院）所収「室町時代の待遇表現体系」での語群の設定にならう。

注4：前稿までに得られた結果をまとめたものである。

注5：注3の文献の第四編「近世待遇表現体系の推移」七七一頁

注6：注3の文献の第一編「江戸前期（上方）の待遇表現体系」より。